

説苑



道路改良會首腦部と道路問題の推移 (二)

—副會長山田英太郎氏—

清水生

山田氏を訪ふ

偕て筆者は山田氏を訪ふて見る氣持になつて、畏友平井氏に紹介して貰らい、某日芝區白金臺町なる山田邸に向ふ途中に於て、フト思ひ出したのは、彼の蘇東坡の名句……看去看來無別事、廬山煙雨浙江潮といふ句であつた。即ち憧憬れて來た名山水も見て仕舞へば何んでも無い依然たる廬山煙雨浙江潮であるとのことである、人物と云ふものも

餘程の偉人か英雄でなければ對面して見ても左程に感ずるものではない、併乍ら廬山を見て始めて廬山が明かになるやうに人も名を聞くのみでは深い感興が湧かないから畢竟その人物に面會して見るのが即ち得るところ多いと考へつゝ氏の玄關について、先づ刺を通じて面會を求めたら心克く客室に通されたのであつた。漸時主人を待つ間に筆者の一番先に目についたのは宋時代の儒者である程子の句であ

る、……順理則裕の四字を澁澤子爵が書きこれに當家の主人が金東と號して合作になつてゐる扁額である。こゝで筆者は順理則裕の四字たるや何等かこゝの主人即ち山田氏の性格を現はして居るのではないかと想像もして見たりして居る間に山田氏は……やお待たせして……と頗る磊落の態度で筆者と對面したのであつた、野人の筆者には氏のこの態度は誠に心持よく感じたのである、録々初對面の挨拶も抜きにして、氏と筆者の談話は泉から流れる水の如く盡るところを知らざる有様であつたが先づ氏は。

氏の操弧界時代

私も若い時代は新聞記者をやつたものじや……左様確か明治六七年頃と記憶するが當時新聞に關係を持つてゐた者は大抵徳川の舊幕臣達ちが多く、またこれ等の人は智識が發達して居つて、なかには西洋などにも行つて所謂新智識を磨いて來つたものも相當澤山あつて、その連中が歸朝して新聞を作つたり、時の薩長藩閥政府を極力攻撃したものでちや……當時東京日々には福地源一郎氏

が居つたが東京日々は御用新聞と云はれて居つたが福地の書いたものは必ずしも御用の筆ではない、朝野新聞には成嶋柳北が居つて却々鋭い筆で藩閥政府を糺弾したものであつた。

と氏は當時の操弧界の模様を詳細に語られたあとに續いて。

私もその當時朝野新聞に居つたが成嶋柳北が社長で末廣鐵腸氏が主筆と云ふやうな格であり、犬養木堂や尾崎悋堂や大石正巳氏等と共に記者として居つたが當時は現今の新聞記者とは多分違つて居て口を開けば國家天下を論じ常に侃々諤々の筆陣を張つて藩閥政府の攻撃に日も尙ほ足らざる状態であつた、そのために新聞は時々發賣禁止を受けたりまた遂には發行停止になつたのもあるやうな次第であつた……あの毎日新聞の如きはあとで付けた名であつて、その當時は沼間守一氏を社長として雲井龍雄氏等が作つて東京横濱毎日新聞と云つて居つた、當時島田三郎氏や肥塚龍、高梨哲四郎氏等即ち後ちの改進

黨系に屬する人々が主として執筆して居つたが、この新聞も私の關係して居つた朝野新聞と同様に薩長の藩閥政府打破については全く同主義であつた。

と氏は言葉を次いで後に錚々たる人物として天下知名の士となつた人々について二三語られたあとに。

夫れから前後を忘れたが、報知新聞……栗本鋤雲氏が社長となつて舊幕府の遺臣でやつて居つたが、そこへ讀賣新聞が出来てこの新聞は名の如く最初は道路を讀んで歩いて賣つたものであつた、又都新聞と稱する新聞も出来たがこの新聞は殆んど全部三面の記事で埋められてあつたやうである。

更に氏と筆者との談話は其後福澤諭吉氏が彼の時事新報を創立したことや、日本新聞等に話があつた後ち氏が犬養毅、尾崎行雄氏等の同志五六名と共に官報といふ名に對抗して民報と稱する新聞を作つて最も激烈に政府當路者の攻撃に筆力を加へたのでこれが間もなく發行停止になつたことや新聞條例の改正……發行停止の全廢について貴衆兩

院に運動したこと、殊に衆議院は異議なく賛意を表して居るが頑迷なる貴族院は發行停止全廢についてはどうしても賛成せず、當時清浦奎吾伯が貴族院の多數會員を擁して居る研究會の首領格であつたから、その清浦氏と激烈なる爭論を闘はしたこと等に話は及んだのであつた。大體山田氏と新聞關係は討論論を以て生命とする曙新聞……及び朝野、日々、報知とこの四つを雁行して當時は四大新聞と云はれて居つたが、日々を除くの外は自由民權論の轟々たる時代に於て國會開設論が非常に盛んであると共に薩長の藩閥政府打破に山田氏等同志は健筆を揮ふつたことに話が進んだのであつたが今度は氏は話題を轉じた。

鐵道問題を研究

元來私が朝野新聞に居つた際にも主として經濟部を擔當してゐた關係上から鐵道問題について相當に研究をして居つたが、朝野新聞を犬養氏等と共にやめて浪人して居つたので朝野の殘黨五六名と共に郵便報知新聞に入つたが、この郵便報知新聞は吾々の入社する前は矢野文雄

君が主筆であつた、間もなく私は多少病氣でもあつたからこゝをやめて郷里名古屋に歸つたが名古屋で愛知新聞錦城新聞を買取つて經營したこともあつた、其後上京して私は新聞界と手を切つて専心鐵道問題に没頭しやうと考へたこれには尾崎、犬養の兩君等も賛成してくれたので鐵道に關する學問……勉強に力を入れたのであつた、

そうして先づ東京の電車鐵道を出願して許可となつたのでこれが敷設は表面に出て大運動に取りかかつたのであつた、又明治二十八年頃には全國を俯瞰して樞要な線を四十三ヶ所程出願したのであつた、その内五六ヶ所敷設の許可も得たが、兎も角東京電車鐵道は其の創立事務所を數寄屋橋側に置いて私は總支配人で創立事務に没頭して居つたが當時甲州系の實業家である兩宮敬二郎氏の出願せる丸ノ内外濠を廻る線路と、星亨一派の東京市街鐵道と云ふ茅場町方面に敷設するのと所謂三團體があつた。私の出願許可になつたのは馬車鐵道……銀座日本橋淺草までの所謂市内目抜き幹線街路であつたが、そ

れが許可されたのであつたそれが三團體即ち兩宮系と星系と私等の關係して居る東京電車鐵道の三會社が許可後合同して名もやはり東京電車鐵道會社で創立經營に當つて居つたのである。

とて氏はこゝで當時の東京市内に於ける電車敷設の狀況を縷々説明されて、そのあとに。星亨氏が壯士を引連れて二萬圓二萬株を渡せと強硬嚴談に及んだことや、其他について創立内部の事情に及んで遂に氏は權利株を他賣して創立關係を斷つに至つた経緯について話されて。

私はかやうな次第で東京電車の方をやめたが、權利株を賣つたので金も相當に入つたので日本鐵道株を買ひ傍ら東京經濟新報を發行して頗る樂な生活が出来たのであつた、そうして又私は房總鐵道や大阪方面の鐵道にも關係して居つたが、鐵道の研究學問をしたので全國の諸々から鐵道の設計等について相談を受けたり依頼されたりして居つたのであつた。

岩倉神社の建設に反對

氏はの話は夫れから次ぎ／＼に展開して所謂盡きるところを知らざる状態であるが、當時東北十三州……縦貫すべき我國の私設では唯一の鐵道大會社である日本鐵道に氏が重役として入つたことや、其他同鐵道が國有後の精算事務に氏が主宰してこれに當つたことに及んで。

日本鐵道は岩倉公が最初大いに盡力して開いてくれた鐵道であるから岩倉神社を建立するの議が起つたから私にはこれには岩倉公を鐵道の神様とすることには反對したのであつたが、岩倉神社建立に際しては既に土地迄で選定買入れをなし、日本鐵道で材料まで準備したが内務省が許可せずして取りやめとなつたのであつた。

と岩倉神社建立の経緯を話されて、更に氏は言葉を次いで。

私は岩倉家に交渉して唯だ單に岩倉と云ふ名前だけを借る承認を求めて獨力で誰れ一人からも寄附等を仰がずして岩倉鐵道學校と云ふ鐵道の學校を作つて現在まで四十六年間心血を注いで經營して幾多有爲の青年を鐵道に

關する實地と有用なる智識と精神の薰陶に當つてゐる。

現在東京驛長である天野辰太郎氏のやうな立派なる人物もこの學校の出身者である其他大陸方面には勿論國內到るところに鐵道運輸事業に關與してゐる本校の出身は影しいのである。

國防義會創立について

氏と筆者との會話は今度は大日本國防義會の創立當時に轉じて。

大日本國防義會は私は自から主唱者となつて今から約三十二年程以前即ち大正元年十一月三日の天長節をトして社團法人として設つたものであるが全體我國の國防軍備と云ふやうな重大な問題をこれまで専門軍人のみに放棄して居て、國民は敢て吾れ關せずと云ふやうな嫌はないでもなかつたのである、これには未だ一般的に軍事思想が發達してゐないのにも基因するだらうが、動員命令とか、作戰計畫等機密に屬するものは勿論一般には絶對秘密でなければならぬが國防と云ふことに關しては種

々な方面に有ゆる關係あるもので政治然り經濟然り又産業然りであるからこれ等を研究して益々國防を嚴にして國家の發展に資する考へから民間に於ける調査研究の一機關の設立を考へて當時財界產業界に於ける知名の士に賛同を求めて作つたものである、而して今日まで會命達成に努力し來つたが、私も最早や老齡に達したから相當の適任者があれば會の發展のため又國家のために誰れか引續いでやつて貰らいたいと思ふて居る。

と述べられたが國防義會のことは前號にも相當委しく書いた筈であるから茲では省略することにする更に氏は道路改良會創立當時の感想を語つて。

道路改良會創立について

回顧すると大正七年の暮れの十二月二十九日のことであつたが大日本國防義會が主催となつて米國の道路改良家のサミュール・ヒルと云ふ男が東京に來て居たので、この男に國防と道路と云ふ題目で講演を聞いたことがあつた。これが端緒となつて澁澤子が主として肝煎で出來

上つたのである、當時私も道路の改良……實際我國の道路の不備は産業開發……國防上から見ても誠に遺憾多々あるのみならず殊に當時の情勢は自動車の益々發達と共に交通上に於ける道路の價值と云ふものは愈々顯著なるに鑑みて、この種の會即ち道路改良會の創立には欣然として參加し以て聊か微力を致した次第である、そうして會の創立後にも引續いて常務理事として主として經理方面の擔當を依頼されて大過なく至つたが、あの紀元二千六百年の御大典の直前に副會長に推選されて老骨ながらこの大任を御引受けして現在に及んで居る。

と氏は道路改良會創立當時の模様等について話されたのであつた。氏と筆者との會談はこれだけのみならず、氏が日本鐵道に居つた時代に當時日鐵が高崎まで開通したので、恐多くも明治天皇には各大臣等は扈從して開通式場に御臨幸遊ばされ……陛下は高崎まで御乗車遊ばされたのについて氏はまた同列車で御案内を申し上げたことや、日鐵が一割以上の配當をなし居つたのに拘らず明治二十九

年には漸く五分五厘の配當を幸じて爲さざるを得なくなつたために日鐵の株主は華族即ち舊大名連中が多數を占めて居たので、これがため彼等の臺所までに大影響を及ぼした原因は吉川技監の日鐵運輸金私消事件に關聯して大騒ぎをやつたことや、運轉手のストライキのために郵便物が青森まで到着せなかつた事件や、政府が新橋横濱間の鐵道布設に關して高利の外債で惱まされたこと等に及び更に話題は轉じて、氏等が在社執筆中に朝野新聞は密かに當時外務大臣であつた青木周藏氏が黒幕として三井と結托の上、表面には波多野承五郎氏が乗出して遂に氏の手によつて買収された話等、面白い秘話を續々として語られたのであるが、筆者は大分時間もながく経過して居るので大體この位にして辭去しやうと思ふて居ると氏は。

勝海舟と儒者重禮

私は孔子主義を奉じて居る……、あの湯島にある聖堂には、徳川幕府が寛政年間に心血を注いで蒐集した幕府の所謂官版と云ふべきものが保管されてあつた、夫れが、

維新大改革の際に聖堂の焼夫と共に版木が何所かに逸散されて仕舞つたのである、この木版は櫻の木に彫刻されてあつて大量で約二百七十餘種のもので實に珍らしく二度と得難い貴重資料である、支那の公使に聞いても支那でもないとのことであつた、この逸散を憂れいて、島田重禮と云ふ儒者が市内各所の古道具屋等を漁つて、漸く六十餘種見出してこれを買集めて居つたがその金に困つて島田氏が一日勝海舟を尋ねてその事情を述べて千圓程の金融を勝に依頼したのであつた、海舟はこれを聞いて引受け當時日本銀行の總裁であつた富田鐵之助氏に話して富田氏は心克く即座に引受けて千圓出したので、島田氏は漸くこの木版を買集めるのに高利貸から借りた金を返済したやうな有様であつた。そうしてこの版木は馬車に積んで四十何臺かの大量のものであつたが、當時仙臺屋敷の倉庫二棟を富田氏の話しで借りてこゝに保管してあつた。これを印刷したいとのことで今の近衛公の嚴父である篤磨公も實行する氣持であつたが、國分青嚴氏

にも相談したやうであつた、また井上毅氏などは豫約出版でもしたらどうかと云つて居たが、いざとなれば實行が困難で却々出来そうにもなかつたのである。

と氏は語つて、これを氏が獨力で出版する経緯について。

昌平叢書の出版

私もこの貴重な版木を後日のために是非出版したいと考へて近衛公にも話して、先づ京都に版木専門の印刷職人があると聞いて人を派して交渉して東京に連れて來て松雲堂書店の主人である藤井利助氏に印刷の監督を依頼して漸く五十部出來たので、これに昌平叢書と名詞したがこれが六十餘種六百六十七卷の大冊になつた實に立派なものになつたのである、而して禮、樂、射、御、書、數の六種に區別して齊戒沐浴して特製の六箱に納めて明治天皇に献上したのであつた、他は一ち／＼箱に入れて目錄を附して伊藤、山縣、西園寺等の元勳や近衛公、

平田東助、澁澤榮一、井上毅、犬養毅、尾崎行雄、島田三郎氏等夫々多數の舊友に贈つてやつたのである。私の

所にも二三部あるからこの次ぎ悠く見せやう。

とのことであつた。漸く茲で話は一荷を告げたので指針を見ると鐵道時間にしては十九時半即ち午後の七時を過ぐることに三十分餘であつたから正午頃から來訪して餘り永くもどうかと氣遣つて辭去することにした、そこで挨拶を述べて起つと。フト傍らに。

おろかなる心につくす誠をば

みそなはじてよ天つちの神

と東郷平八郎元帥の書いた懸扁が目止つたので、この句についてまた、氏と二三言葉を交して漸く山田邸を辭去するに當つて恐縮にも氏にわざ／＼玄關まで送られて、外に出ると初冬の日は既に早くも暮れて、暗らき寒む空には冬星が燦き、孤獨にして寂びしい筆者には何となく悲しさ胸にわぐを覺へると共に體には強き寒さを感じるのであつた。

築地の梁山伯

茲で筆者の脱線を許して貰らうて、曩に山田氏と對談の

際にも氏が話されたが、明治政府が我國に最初の鐵道を敷設するについて高利の外債で相當苦んだ云々のことがあつたが、即ち日本に初めての鐵道……新橋横濱間の鐵道敷設に關して維新物語叢書は當時の六ヶ敷い文章を以て書いてゐるが、これを讀んで見ると却々面白い當時の狀況が判かるので、難解のところを平易に直して抜書して見ると。

明治二年三月大隈は「重信侯」東上して翌年の十二月まで築地京橋の三千石の旗本戸川安宅の邸に居つた、そこに伊藤博文、井上馨、五代才助、澁澤榮一、山口尙芳、中井弘二、大江卓等が所謂この築地の梁山伯に寄寓して急進派の先鋒となつてゐた、……彼等は先づ中央政府の財源を確立するために、版籍奉還と廢藩置縣を斷行することに意見が一致してゐた、これには有ゆる舊物破壊と百事改革は彼等の目標であり、電信の布設、造幣寮の創建、鐵道の建設等々各種産業の開發は梁山伯の所産であつたといふも敢て過言ではない。

と當時伊藤公や大隈侯、澁澤子等の若き時代の思想と其

の企圖して居ることを書して。

鐵道敷設に易者加はる

偶々英國人ネルソン・レイといふ者が來朝して英國公使館に泊つてゐたが、公使パークスの紹介で政府當局者に面會を求めて來た、レイに應接したのが大隈、伊藤であり、之れには面白いことには易斷で有名な高島嘉右衛門が加つてゐる。その時レイは頻りに鐵道の效能を述べ、日本でも先づ鐵道を布設して交通を便にして、その收入を得るがよいと云ひ且つ日本政府にして之を企意志があればその資本は自分で供給すると申込んだのであつた。……鐵道を京濱間に敷設するといふことは幕末外國奉行であつた小笠原壹岐守が慶應三年十二月に米國公使館の書記官アルセ・ポルトメンにその敷設權を許可したので、新政府となつてから米國公使シ・イ・デロングから色々と苦情が生してその時衝に當つた大隈は段々取調べたところこれは小笠が恣しまゝに約束したので幕府も知らなかつたこと且つ小笠原は現在失踪して何處に居

るか所在不明であると申立てやつと約束を取消したこともあり。

と書いてあるが、思へば我が領土内に國の動脈である鐵道などを外國人に敷設權を奪はれるなど實に慄然とする國權上由々敷しいところを、大隈によつて救はれたのもまた神州の庇護である。

政府はその敷設を欲しながら工事費用に困つてゐた際であるから渡りに船と喜んだ……易斷の高島嘉右衛門は鐵道の大切なことに早く著眼し之を民設として速かに開きたいと、鐵道を東京から長崎の端まで敷くことは取りも直さずこの道中を三十五里に縮めることであるとその許可權を得ようとした。勿論當時としては名論卓説であつて鐵道に乗れば三日半で長崎に行ける一日十里行程として三十五里に短縮される、費用はレイから公債の方法で百萬圓借りるといふ、誠に都合の好い話である。それならば民間より政府でやらうと云ことになつたが、伊藤も大隈も公債といふものの性質を熟知せず又レイの何人

たるやも知らず、只だ伊藤、大隈等は新事業を起すに頗る熱心で國費の缺乏を充たす方法に苦心した時代であつたから容易にレイの交渉に乗つて了つたのである。

伊藤公大隈侯公債を知らず

と、大隈、伊藤等は當時未だ公債の何たるやを知らず、日本に最初の鐵道敷設をやりたさに盲目的にレイの狡猾なる交渉にうま／＼と乗つた経緯を詳しく書いて、尙ほ滑稽なのはレイを英國のネルソンと聞いて伊藤「博文」は輕卒にも之れは彼のトラファルガルの英雄ネルソン提督の一族であると妄信し、殊に名刺の肩書にナイトとあるので、愈々海軍軍人と思ひ込み、大隈は亦英國公使館に泊つてゐるので公使も餘程レイを禮遇して居るのだらうと速斷したことを記載して居るが、當時に於ては大隈伊藤の如き先覺者で政府要路の大官すら智識はかやうであつたのは頗る面白い話である。

偕て本國に於けるネルソン・レイの地位や身分信用は一切調査しなかつた、ところが後で訊くとレイは大山師

で英國公使館に泊つたのは當時ホテルがなく止むを得ず厄介になつた渡り者で、最初上海邊を流浪し鐵道敷設を支那當路者等に勧誘して自分で請負はんとしたが、唯れも信用する者なく轉じて横濱に來つて、自ら大資本家と稱して高島を先棒にパークスの紹介で大隈伊藤に會見を申込んだがその實本來の無一物の素寒貧であつたレイは一面に於ては日本に對して高利貸の債主となり更に本國に歸つては日本政府の代理人と稱して低利に公債を募集して中間で旨く利輔を取らうといふ魂膽であつた、而して政府の大官をうまく籠絡して、大隈伊藤もレイを信用して遂に海關稅を抵當として百萬磅を一割二分利附で借款の契約をしたのである。

レイに一杯喰さる

これが明治二年の末であるが現在から觀ると噴飯に値する大失敗を伊藤や大隈が當時政府の大官としてやつてゐる而してこの問題は翌年の明治三年の末隅々英國から到着した新聞紙上に……日本政府は海關稅を抵當として九分利附

公債百萬磅を募集するといふ廣告が出てゐたので、大隈や伊藤は非常に驚いたのであつたが、一體當時伊藤や大隈の考へでは鐵道を敷設するに付いて外國資本を借ることは極めて秘密にして假令ネルソン・レイが全部資本を出さなくつても彼の友人に話して大資本家の庫中から極めて秘密に借入れられるものと信じてゐたのであつた、然るに豈圖らんや、公然新聞に廣告までして普く應募者をロンドンにて世界市場に求めるといふつたから吃驚仰天したのも無理がなかつたのである、當時政府當局は愕然として狼狽し殊に築地梁山泊の大隈伊藤は改進に急にして賣國の奸臣と目せらるゝに至つたのもこの時である、政府は一割二分の利子を支拂ふ契約なのに倫敦では九分利附公債を募集してゐる實に旨ま／＼とレイに一杯喰されたのである、茲に於て政府は協議の上公債募集を取消して既に募集したものは直ちに償却せしめようと前島密と上野景範の兩氏を英國に特派したのであつたが兩氏はまた迂濶にも該契書を始めて船中で繕くと、外務大輔寺島宗則の捺印署名した……事態容易

ならぬことを思つたのであつた、兎に角ロンドン着後先づ辨護士に依頼して公債償却を相談したが公債といふものは一度募集すれば證書は種々の手に次ぎ／＼と移つて所有者が常に變るから買占の方法より途がないといはれて、試みに買つて見ようと仲買人に依頼するとその風説が早くも翌日市場に漏れて、日本公債の市場が五磅も騰貴した有様であつたので買占めを見合せて辨護士に頼んでネルソン・レイに損害賠償金を支拂つて關係を絶ち、更にロンドン東洋銀行に委嘱して九分利附公債百萬磅を借入れてゐる、これが最初の東京横濱間に敷設した鐵道敷設費に充當されたのであつた、斯様な失敗をして居るのを思ふと實に沙汰の限りである。

氏の鐵道事業に對する達觀

今や大東亞戰爭も決戰の連續たる長期消耗戰に對處せねばならない段階に突入して居る更れば今年經濟界の主要課題は如何にして軍需品の生産を益々増大するかにあるが、これについては生産増強の基礎物資の増産のため超重點主

義を實施して、限りある物資を最も有效適切に活用して以て製品を多量に而も迅速に生産せねばならないのは勿論である。而して生産増強の死命を制するものは畢竟大東亞廣域に互つて戦力培養資源を獲得せる現在に於てその資源の活用如何に存するのである、さればこれを十二分に活用するには先づ以て輸送力の増強促進を計ることは最も肝要である、輸送力を構成するには勿論海上輸送と陸上輸送とになるが、この兩方共に鳥の兩翼車の兩輪の如く圓滑に而も至大の能力を發揮せねばならないことは緊説するまでもないのである、而してこの方面に携つて居る人には勞務と云はず輸送智識と云はず現下全智能を傾注して所謂國家總力戰達成に邁進して居るのである、山田氏は既に何十年か以前に陸上輸送を構成する要素中、その根幹をなす鐵道問題に早くも着眼して、氏が若き時代既に操孤界に身を置いてゐる際鐵道に關する當時先進諸外國の狀況其他について種々研究調査をなし、斯界の智識を涵養してこれを實地に移して身を以てその衝に當つたのである。殊に我國鐵道

事業の將來に鑑みて鐵道從業員を養成する唯一専門學校を獨力以て創設して斯界に幾多の有爲なる人材を提供したるが如きは全く凡庸なる者の企圖し能はざるところにして現在決戰體制下……國家總力戰の敢行……生産増強必行に所して氏が多年に互つて養成したる、岩倉鐵道學校出身の二萬に餘る鐵道從業員が或は大陸に或は國內に於て如何に戰時輸送關係に渾身の努力奮闘をなしつゝ生産力増強に間接的に絶大の貢獻をなしつゝあるかを觀察すれば山田氏の卓識や誠に敬服に値するのである。氏は民間に在つて鐵道事業に貢獻するところ多大の故を以て勳六等に叙せられて居るのを見ても亦其の一端を窺ふことが出来るのである。筆者の氏と初對面に見る印象は一見頗る磊落豪放のやうに見えるが却々その頭腦は緻密にして細事と雖も疎かにせず、殊に經理と計畫には優れてゐるやうに思はれるのである。亦氏は孔子主義を奉じて居るだけあつて漢學には頗る造詣あつて氏の書齋には支那古今の書籍は滿積してあるが新春敬愛の友平井氏に、

説苑

夢裡當言夢誰知

覺後思不知今亦夢

更說夢中時老年

風光只如飛欲俟

河清人壽幾八十二年無事客

送詩して來たのを筆者は見せて貰らつたが實に作詩は堂に入つたものである。畢竟底知れぬ深さと明知の人であるやうな感じがする。……若しこの拙文に誤りがあつたなら勿論その責め筆者にあることを斷つて置いて擲筆することにする。一山田氏の稿をばり」

讀者諸賢に告ぐ

本誌が目下「道路改良會首腦部と道路問題の推移」と題して連載中の記事について水野會長に關しては曩に「歴代内務土木局長と其時代」中に於いて既に記載したることを以つて茲に重複を避けるために今回は省略することにしたことを斷つて置く、

訂正

訂正 第二十五卷第一號六十一頁の六回聖賢を容れずは六國と訂正、同六十五頁の定藏は定義に訂正、同六十二頁昌平護書を昌平叢書に訂正、同六十三頁金澤藥學計畫は高輪藥學計畫に訂正、